高山の文化を高めた人々 15

若松様（めでた）・高山音頭などを広めた 保　浅太郎

保　博司

父・浅太郎の家は村の鍛冶屋でした。父は鍛冶屋としてすばらしい腕を持ち、その農具などたいへん評判がよく、村の人々から敬愛されていました。

そんな父にもう一つの得意がありました。それは歌です。仕事をしながら唄う声は美しく、透き通った歌声は仕事場の外まで流れ、道行く人が立ち止まり聞きほれたそうです。

父が民謡を好きになったのは二十才頃からだったようです。その頃、西之一色町に住んでいた二反田という民謡の好きな方があり、いつも一緒に唄い教わっていたようで、それがやがて民謡に打ち込むもとになったのでしょう。

「保浅」人は保浅太郎のことをこう呼んでいましたが、天性の美声に加え民謡に精通するようになると、「是非レコードに吹き込んで欲しい」という要望から、昭和五年大阪市でコロンビアレコードに「高山音頭」と「ひだやんさ」を吹き込みました。その頃から、店や家庭の中から保浅の唄う民謡が聞こえてくるようになりました。

50代のころ三波春夫と保浅太郎（右端）

昭和二十七年頃、石ヶ谷（現在の山田町の原山の下）から、八軒町に移転してからは、友達も多くなりました。そして、人づき合いのよい父は、いたる所で民謡を唄いました。今ならきっとタレントとして活躍したことでしょう。

民謡保存会に入会してからは小坂豊山さんとのお付き合いが始まり、一緒に活動をすることが多くなりました。

父は、色々な宴席にも招かれましたが、そんな時、父は芸者姿になって出かけたものです。その芸者姿で三味線を弾きながら唄う民謡がすばらしく、本職の芸人顔負けだったとは、当時を知る人の言葉です。

高山では宴会には必ず「若松様」（通称「めでた」）を宴の中頃に唄う慣例になっています。

この唄が出るまでは、各自の席で飲食しますが、この唄が出ると自由に席を立って歓談してもよい習わしなのです。だから、「めでた」は宴席ではとても大事な唄なのです。

宴席に多く出るようになった父はこの「めでた」に心をひかれたのでしょう。それから「めでた」の唄い方に没頭しました。昭和三十年頃と思います。

やがて、『めでたは保浅でなくては』と言われるほどになり、「めでたの保浅節」が誕生しました。

「めでた」は、結婚の結納や結婚式後の披露宴、お目出たい宴席にも無くてはならないものでした。

ところが、その頃めでたを唄える人が少なく、何とか唄える人が多くなるようにと願い、その普及に専心しました。各校下の社教委員会も年間行事に「めでた」を唄うよう奨励し、その指導講師に招かれることが多くなりました。おかげで高山市では、宴席や行事では「めでた」がなくてはならぬようになって参りました。

こうした実績を踏まえ昭和中頃からは、高山民謡保存会長・高山音頭会長を勤め、昭和四十六年には高山観光功労者表彰、昭和六十年には岐阜県芸術文化活動特別奨励賞を受けました。平成四年三月、惜しまれつつ八十五年の生涯を閉じました。